

夢を追いかけて 鷹匠という生き方を選んだ男

「鷹匠」松原 英俊さん

東北の山間部では、農民の冬期の生業としてクマタカを使った鷹狩りが受け継がれてきた。それは豪雪に覆われる山村で生まれた習俗である。国内最大級の猛禽類であるクマタカとイヌワシを使って実猟ができる鷹匠の「最後の後継者」と呼ばれる松原英俊さんを訪ね、山形県月山の麓へ足を運んだ。

鷹を籠手に止ませた状態で雪山を何時間も歩く。鷹の足には短い縄が結びつけられていて、鷹匠は常にこれを指で握っている。鷹が獲物を見つけて飛び立とうとすると、その縄を放す。©赤川修也

PROFILE

松原 英俊 | まつばら ひでとし

1950年、青森市生まれ。慶應義塾大学文学部東洋史学科卒業後、山形県真室川町の鷹匠・故沓沢朝治さんに弟子入り。1年後に独立。真室川町の山岳地帯にある山小屋に移り住み、8年間自給自足に近い生活を送った後、山形県朝日村の山小屋で6年間過ごす。1996年、家族とともに山を下り、鶴岡市田麦俣に移住。クマタカとイヌワシを使って実猟を続ける。鷹狩りは冬期間（12月下旬～3月中旬）に限定されるため、春から秋にかけては月山や朝日連峰、飯豊連峰の山岳ガイドとしても活動。講演やネイチャースクールの講師も務める。

自然と動物が好きな少年は 山登りと冒険を愛する大学生に

「山間部の農民の生業としての鷹匠は、東北で生まれた山村文化です。そして風土と生活に根ざした、自給自足のための生活技術のひとつです」

そう語る鷹匠の松原英俊さんは、クマタカとイヌワシを使って狩猟を生業とする「最後の後継者」と呼ばれている。

松原さんは自然や動物が大好きな少年だった。カラスやナマズ、ヘビなどを自宅で飼っていたという。そして中学1年のときにテレビで見たドキュメンタリー『老人と鷹』(※1)に衝撃を受けた。後に師匠になる鷹匠の沓沢朝治さんをモデルにした番組だった。

「老人と鷹のふれあいに、言葉が出ないくらいものすごく感動した。でも、そのときは鷹匠になりたいという気持ちはなかった」

高校は進学校に進み、やがて慶應義塾大学文学部に入学。そして山との深いつきあいが始まった。大学時代に三千メートル級の山をほとんど制覇した。

「授業に出るより山登りの時間のほうが多く、一人で山に登っていた。しばらく『野鳥の会』にも在籍したが、みんなとワイワイやるよりも一人で自分の好きなように歩いて生き物とふれあう。それが自分には合っていると思った」

大学時代の松原さんは、冒険家にあこがれていた。やがて、当時まだ誰も挑んでなかったアラビア半島のルブ・アリ・ハリ砂漠の縦断を計画。大学を1年休学して冒険に出かけようと決め、アルバイトで資金を稼ぎ、トレーニングも積んだ。

しかし、サウジアラビア大使館から入国ビザは出なかった。「すでに大学に1年間の休学届けを出したあとだったので、その1年間をどうやって過ごそうか」と思案した松原さんが選んだのは、山村での生活だった。

老境の鷹匠に弟子入り 独立までの紆余曲折

大学を休学した松原さんは、北上山地にある山形村で1年間、農作業を手伝って暮らした。「村で暮らしながら、どんなに貧しくてもいいから自然の中で動物たちとふれあう生活がしたいと思うようになっていったんです。ただその村は冬になると仕事なくなるので、男

たちは東京など都会に出稼ぎに行っていた。田舎に住んでいても半年間東京に稼ぎに行くのでは、自分の生き方としては意味がない。そこで、冬でもできることを考えたら、マガキと鷹匠があった。鉄砲を使うんじゃなくて、生き物を訓練して狩りができたらこれ以上おもしろいことはない。こんな流れで鷹匠になりたいと思ったんです」

一度は旅行会社に就職が決まったものの、「どうしても鷹匠になりたい」という思いが捨てきれず、内定を断った。反対されることを予測して両親には「もう決めただ。鷹匠になる」と一方的に宣言し、ドキュメンタリー『老人と鷹』で感銘を受けた鷹匠・沓沢朝治さんが住む山形県真室川町に向かった。

当時79歳であった沓沢さんへの弟子入り願いは何度か断られたが、松原さんは野宿しながら毎日通った。そしてやっと弟子入りを許された。

「師匠は鷹を使う技術に関して、聞いたことはすべて教えてくれました。師匠は子供の頃から70年近くも鷹と一緒に過ごしてきた人。クマタカを使う技術は超一流でした。」

師匠との仲は決してスムーズではありませんでしたが、何があっても鷹匠になりたいという夢だけは決して捨てませんでした」

やがて独立を決意する。

「師匠は高齢で、鷹を連れて雪山を歩くことはできませんでした。一緒に狩りができない



のであれば、ずっといても基礎の基礎しか学ぶことはできません。実際の狩りが最終的な目的なので、独立しようと思ったんです」

独立4年目に鷹が初めて 獲物をしとめ、雪の中で号泣

独立後、松原さんは山形県真室川町の山岳地帯にある、電気・ガス・水道のない山小屋に移り住み、試行錯誤しながら鷹の訓練を始めた。連れて行った鷹は、師匠から買った一羽だけだった。

「師匠と衝突して家を出たときはすごく落ち込んでいましたが、一方ではこれから誰に気兼ねすることなく、自分と鷹との山での生活が始まるという希望もありました。貧しくても自給自足できるという自信はありました」

鷹の訓練とはどんなものなのか。

「飢えさせた状態の鷹(※2)を自分の手から、鶏などのオトリに飛びつかせる訓練があります。でも、オトリの鶏に飛びつかせたいんだけど、訓練を手伝ってくれる人がいないのでそれもできず、結局鷹を止まり木に止めておいて、自分でオトリの鶏を投げて飛びつかせました」

実際の狩りは、すぐにはうまくいかなかった。

「ある程度訓練できたと思って山に出かけ、6、7メートルの場所からウサギが飛び出す

それでも、
何があっても鷹匠になりたい
という夢だけは決して捨てなかった

※1 1962年度カンヌ国際映画祭テレビ映画部門グランプリ受賞。日本の鷹匠文化を伝える貴重な作品。
※2 鷹は満腹だと獲物を襲わない。鷹を絶食させるのは、狩猟本能を呼びますため。限界に近い飢餓状態をキープすることが求められ、羽根の色艶、口の中の色やフンの色などから総合的に判断するという。

ことがあっても、かなり空腹なはずなのに鷹はじっとウサギを見ているばかり。そういうことが何度もありました。今以上に空腹にしなければいけないのかと考え、鷹をさらに空腹にすると、やっとウサギを追いかけられるようになった。これでウサギが捕れるという手ごたえをつかんでいるときに、鷹が死んだんです。絶食が原因でした」

鷹が逃げていったこともあった。挫折と試行錯誤の日々が続いた。独立して4年の月日を重ね、やっと鷹が野ウサギを捕まえた。

「腹の底からこみあげてくるものがある、雪の中で大声をあげてオイオイ泣きました。自分はこの目のために生きてきたんだ、この一瞬のために耐えてきたんだ、という思いでした。あれ以上の感動は今もって味わったことがないし、これからもないかもしれない」

鷹とともに生きることに
意味があり、人生がある

これまで弟子入り希望者は数名いたが、決め手に欠けていたという。

「私が師匠に弟子入りしたときのような強い覚悟や情熱をまったく感じられなかったんです。私以上に自然と生き物と鷹が好き、という人でなければ弟子入りさせないでしょう」

自らの技術を伝承させていかなければいけないという使命感はない。しかし、こんな



森の王者・クマタカの全長は70~80cm、翼を広げると160~170cmにもなる。4キロ先の獲物を見つける視力を持ち、時速200キロ近いスピードで飛行できる。© 赤川修也



鶴岡市田麦俣の自宅前。冬になると雪が4メートル近く積もる。国内有数の豪雪地帯だ。晴れていれば、霊峰月山の頂上まで見えることもある。© 赤川修也

ふうにも考えている。

「自然が好きで、鷹がいれば他に何もいらぬ。そういう人が私の生きている間に現れなくても、ぜんぜん気にならない。私の技術が、私が死ぬことで途絶えたとしても、その後生まれた人で、自然と生き物と鷹が好きという人なら、いろんな手段を使って鷹の訓練の仕方を調べると思います。そして私と同じように試行錯誤しながら、時間がかかるかもしれないけど、クマタカ使いの技を復活させることはできるでしょう」

それでは、鷹匠の極意とは何だろう。

「竹職人は『竹に学ぶ』と言いますから『鷹に学ぶ』という言い方も可能です。鷹の弟子になったつもりで臨むということです。私の考えは、自分と鷹は対等。できるだけ長い時間一緒にいて鷹の気持ちを感じる。するとこちらの気持ちも相手に伝わるという気がします。鷹が

多くの人に気づかれなくても、
私は自分の命を生きている
と感じています。
私はそれで満足だし、
豊かに生きられると思う。



雪上で焚き火をおこし、ぬるま湯を飲ませて鷹を暖める松原さん。2週間から1ヵ月続く狩りの間、松原さんは鷹とともにテントや雪洞で眠るという。© 赤川修也



東北の農民鷹匠による 生業としての鷹狩り

日本では4世紀頃から伝わる鷹狩り。ハヤブサやオオタカなどを操って貴族や武将が興じる遊猟としての鷹狩りとは異なり、東北の山間部では江戸時代の後期から農民の冬期の収入源として鷹狩りが伝えられてきた。大型のクマタカやイヌワシを馴らして野ウサギやタヌキなどを捕らえる伝統的猟法である。しかし狩りを生業とする鷹匠は、特殊な技能を要求される割に獲物が少ないことや、ウサギなどの獲物が売れなくなったことで、その伝承者は自然消滅していった。



RETURN TO NATURE
<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~Takajou/>

そばにいと、人間がそばにいるような感覚になります。それは戦友であり、無二の親友です。私は妻子よりも鷹が大切。妻子とは別れられても、鷹とは別れられないでしょう」

鷹匠の魅力や意義は、言葉にしがたいという。「でも、最近はこちらも思うようになりました。雪深い森の中で鷹とともに生き、狩りを続けるという生活に根ざした生き様は、多くの学術論文や研究報告に負けないほどの意味があるものだ、と。たとえそれが多くの人に気づかれ

なくても、私は自分の命を生きていて感じています。私はそれで満足だし、豊かに生きられると思う」

最後に、松原さんの夢と理想とする鷹匠像を尋ねた。

「私は70歳、80歳になって足腰が弱くなっても、ゆっくりでいいから一步一步、雪山を鷹と一緒に歩いていきたい。それが私の最後の夢でしょうか。死を迎える瞬間まで鷹とともに生き、鷹とともに死ぬのが私の理想です」

Text by : 綾瀬良太

にっぽんきち

日本吉

n i p p o n - k i c h i

<http://nippon-kichi.jp/>

Linkclub to the future, produced by KAI

日本の美意識で綴る **自薦他薦** **無料サイト**

日本吉は、あらゆる日本の美意識を Web サイトの中に集め、その豊かさを共有し、世界に発信していきます。

自薦他薦無料サイトです!

「日本吉」は、日本人がデザインしたもの、日本でつくられたもの、日本の文化が生きているものなど日本の美意識が表現されているものであれば、自薦他薦を問わずどなたでも記事や画像を無料で投稿できます。

日本の美を世界へ発信します!

日本の美を世界に同時発信するために、英語による表示切替を設置しました。これによって世界中の人々に日本文化や美意識を紹介することができます。

マジックガーデンと結びついています!

マジックガーデンに出店中のショップで日本の美意識が表現されている商品は、日本吉からショップにリンクを張ることができます。その場合、マジックガーデンのロゴが表示されます。